

夢魔の精

1

その夜に見た夢は、潤那にとって好ましいものだった。

十四歳。

取り立てて早熟でもなかった彼は、最近になりクラスメイトが期せずして露わにした太ももに胸の高鳴りを覚え、また教師を含め幾人かの女性の裸体を想像するという快感を知るようになった。

この興奮のはけ口となる行為も、自然と行うようになった。あるとき道端で犬が体の一部を激しくこすりつけているのを目にして、（自分は意外と獣の本能のようなものが残っているのかもしれない）などと感じた。

ただ男友達の間で時折出てくる夢の中での官能。そんな体験は未だ出くわした事がなかった。それが、ついに今宵体験できたのだ。

しかもそれは想像していたよりも、遥かに心地良いものだった。

視覚とも違う。想像とも違う。

体温があり、腕の中に肉感までもが感じられた。

このような類の夢でなく、友達と遊んでいるとか家族でどこかに出かけているとか、あるいは幼稚に空を飛び回っているような夢でも、これほどの実感が伴うものはなかった。

内容を別にしても、これまで味わった事がないようなりアリティに満ちた夢。

この日の夢は、まるでどこからか現れた女に自分が本当に抱かれ、体を委ねられている-----
-そんな現実味に溢れていた。

けれどもひとつだけ奇妙な事に、潤那は翌朝気づく。夢の中で間違いなく自分を抱いた女へのほとばしりを感じたはずなのに、シーツはもとより、下着類にも一切汚れはなかったのだ。

美莉がその夜に見た夢は、とても受け入れられるものではなかった。

十七歳。

整った顔立ちに加えどこか人を誘惑するような眼力があるために勘違いされるが、恋愛には一途なところがある。付き合っている英司とは中学の終わりからだから、もう三年近くになろうとしている。そのあいだ違う異性からの告白や軽い誘いもいくつもあったが、どれもキッパリと断ってきた。

そんな美莉がよりによって、夢の中とはいえ見知らぬ男に己の肉体を奔放に弄ばれたのである。そして美莉がいっそう自己嫌悪を深めた訳が、この夢の中での体験に激しい興奮を覚えたという事にある。それは英司との体験よりも、遥かに深いものだった。

空想の類である夢の中とはいえ、初めのうち、美莉が男を拒絶しようとしたのは確かだ。けれども男は美莉の体にのしかかり、手足の自由を奪い、激しく己の体を美莉の中にさし込んできた。美莉は夢の中で間違いなく犯されていたのだ。それでも、時間の経過とともに自分が激しい興奮を覚えたという気持ちに嘘をつくことはできず、目覚めた美莉はベットの上で己を恥じた。そして改めて、己の気持ちを強く持つ決心をした。

けれどもその思いをあざ笑うように、己の体の中で残酷な変化が起こっているの気づくのは、数週間後の事だった。

名倉家は、今時の家庭にしては珍しく親子揃って朝食をとる。時おり父の幸次が早めに仕事に出たりすることはあるものの、子どもが大きくなってきてもこの習慣は変わらない。

長女の美莉が進学したら一人暮らしをしたいと言っているから、もしかしたらこの幸せはもう長くは続けられないかもしれないが、それでも居る間は続いて欲しいと幸次は願っている。妻の菜穂はそんな幸次の希望を呆れるように笑うが、本人も満更ではなさそうだ。

「何あんたニヤニやしてんのよ」

美莉が隣に座る弟を、横目で睨む。

「別に、してないよ」

潤那は口を尖らせて言い返す。

「してるわよ。何か良い事でもあったの」

「別に・・・」

照れを隠すように潤那は箸を動かす。目元は、いつもよりいくらか緩んでいるようだ。

「気持ち悪いわね。朝から」

「姉ちゃんこそ、朝からヒステリーなんだから」

弟の言葉が気に障ったのか、美莉は箸を突き立てんばかりの勢いで強く握り締めた。

「ほら、朝から止めなさい。あんたたち」

母の菜穂がようやく朝の支度を終え、テーブルに着いた。

母に諭されて、不服そうに美莉は食事を続けたが、イライラが抑えられないらしい。

「お母さん、今日の卵なんか味が変だよ」

目玉焼きを口にしながらそんな憎まれ口を叩いた。

「そう？」

「変じゃないよ。変なのは姉ちゃんの方じゃないのか」

弟がまた余計な事を言い、姉の目を吊り上げる。

その間に母は美莉の目玉焼きを少しだけ取って口にしてみたが、別におかしな味ではなかった

。

美莉の方の勘違いか、あるいは何か気に入らない事があってそれが味覚に影響しているのか。本人もそれほど気にするほどではないらしく、箸を止めることはなかった。

けれども母の菜穂は、この違和感に妙な胸騒ぎを覚えた。

酷い臭気というものはしばらくすれば消えるものだが、ここはそうではないらしい。風がなく淀んでいるせいか、それにしても異常である。

肌理が一定していないざらつく砂。所々に転がる巨大な岩。まるでこの醜悪な風景そのものがこの臭いを好んでいるかのようだ。

そこを歩く生物は、少しもその臭いは気にならないようだ。足があるのかないのかわからないのだが、歩みの早さは人間といくらも変わらない。二つの足跡も砂の上をしっかり残っているのだが、どう見ても足らしきものは確認できない。

それはまるで緑色のコンニャクのように見えた。人間の子どものほどの大きさのコンニャクが、砂漠の中を自ら進んでいるのだ。

「おい、アシュラット。いるんだろ」

驚くことにそのコンニャクは、言語能力を持っているようだ。

そこに、これまでとは比べものにならないほどの激しい臭気が立ち込めた。

コンニャクの全身から、汗のようなものがしたたり落ちてくる。そのヌメヌメした体を伝うものだから、汗はベトベトした気味の悪い液体に見える。

「モルマか」

聞こえてきた声は、ハッキリとして知性さえ感じさせる、落ち着いたものだった。

「おお、臭い臭い。これは堪らんわ」

コンニャクの方が、顔を顰めてみせた。そう、その胴というか体全体というかの真ん中には、目と鼻と口とがあったのだ。

「久しぶりだな」

知性的な声は、コンニャクのしかめっ面など少しも気にしていない風だ。

「おまえが面白いモノを捕まえたというから、見に来てやったぞ」

コンニャクは甲高い声を張り上げた。

あたりの岩が、総毛立った。比喩でなく、岩肌のザラつきが一齐に逆立ったのだ。そしてその岩肌からは、常人であれば鼻が曲がるほどの酷い臭気が噴出した。

けれども、そんなものは序の口に過ぎなかった。空間に切れ目が入ったかと思うと、それまでの臭いさえも気にならなくなる程の淀んだ臭いが漂い、あっと言う間にあたりを支配した。

「まったく、貴様は酷い臭いだ」

コンニャクはそういったが、本心からその臭いに辟易しているという訳でもなさそうだ。

「よく来たな」

空間の裂け目から現れた、知性的な声の主。そしてこの臭気の原因。

それは巨大なネコ、いやネコのような生き物に跨っていた。

目覚めたばかりで寝ぼけたような眼をした男。けれどもよく見ると、胸のあたりに老婆のそのように干からびた乳房が垂れ下がっている。ずっとこのネコのような生物にまたがっているのか、足はクラゲのようになり、ただ下半身についているだけで歩行の役になど立ちそうもない。

「さっさと見せろ」

コンニャクはまた甲高い声をあげる。彼らに挨拶などはないらしい。

「その岩の裏に、繋いである」

アシュラットと呼ばれるネコに跨った男(?)は、そのとろんとした目で方向を示して見せた

。

「どれどれ」

モルマと呼ばれるコンニャクは、いそいそと指示された岩の裏へと回る。

「ほう、これはこれは」

コンニャクの中心にある顔が、くしゃくしゃに歪む。

岩に繋がっていたのは、この醜悪な二体の生き物とはあまりにも対照的な、透き通るような肌に金色の長い髪を持つ裸の女だった。一般の西洋人のそれとは違い、白い肌はきめ細かく、とてもこの世のものとは思えない。また明らかに人間とは違う特徴があった。よく見ると彼女の背中には、鳥のような翼の先端があるだ。それはまさに、古来より様々な絵画に描かれ続ける天使の姿に酷似していた。

とすれば、その天使にこのような仕打ちをする存在。それは悪魔に他ならない。甲高い声の緑色をしたコンニャク、モルマ。ネコのような生物にまたがる、とろんとした目で酷い臭気を放つ男(?)、アシュラット。この二つの生き物こそ、さまざまな伝説につたえられる悪魔の姿だろうか。

モルマの顔というか体にある口から、蛇のように長い舌が繋がれた天使の乳房へと伸びる。

天使は避けるように顔を背けるが、哀れ、体は繋がれているためにまったく動かない。豊かな乳房、その淡いピンク色の突起部分に、舌がまるで蛇がとぐろを巻くように絡みつく。

天使はまた、激しく顔を背けようとする。目は少しでもその現実を受け入れないようにするためか、きつく閉じられている。頬がうっすらと火照ったようになっているのは、己の乳房に感じる快感のせいだろうか。

「グヒィ、グヒヒヒヒ」

緑色のコンニャク、いやモルマは野卑な笑いを発した。天使の抵抗する様が嬉しいのか、それとも自らの舌が快楽を与えているという満足感か。アシュラットはそれを、ぼんやりとした目でただ眺めている。

「おや」

モルマが何か他のものに興味移ったのか、舌を引っ込めた。

「この天使、股におかしなものがついているぞ」

そう言って天使のもとに、さらに近寄る。モルマの奇怪な体型のため、顔のあたりがちょうど興味を持ったという位置、つまり天使の足の付け根あたりにくる。

「ああ、それは私がつけたのだ」

ようやくアシュラットが口を開くが、やはり目はぼんやりとしたままだ。

「そうか。グヒィ、グヒヒヒヒ」

またモルマが、野卑たる笑い声をあげる。天使は逃げるように顔を背けるが、やはり体は一步も逃れる事はできない。

そんな天使の股の部分、もっと直接的に言うと股間の部分から伸びる小さな突起物を、モルマは指先で軽く弾いて見せた。

するとその小さな突起物は、まるで生き物のように小さく動き、やや膨らんだ。

「おっ」

モルマは面白そうに、同じ動作を二、三度繰り返した。するとその突起物も動きを激しくし、また膨らんだ。

「グヒィ、グヒヒヒヒ」

モルマが天使の顔を見上げると、天使の頬は夕日のように真っ赤に染まっていた。堅く閉じられた目には、うっすらと涙のように光るものもある。

「こいつ、感じてやがる」

モルマは笑い転げた。

「当たり前だ。私が付けたものだ。性能も快感も、本物の男性器とまったく同じだ」

アシュラットはやはり無表情に、自分を誇示するように答えた。

そう、天使の股の間、女性器の真下にある突起物は、男性のペニスそのものだった。

「ひでえ事しやがるなあ」

そう言いながらもモルマは愉快そうに笑い続けているのを見ると、本心ではそんな事は少しも思っていないらしい。

「当たり前だ。私に歯向かってきたのだからな。当然の報いだ」

アシュラットの淡々とした口調からは、それがどれほどの怒りなのかは全く窺い知る事はできない。

またモルマは指先で天使のヴァギナに近接して生やされたペニスを、二、三度指で弾いた。ペニスは上下に激しく動き膨らんだが、モルマはそれには興味を示さず天使の顔を見上げた。

「これじゃあお美しい天使様も、ただの変態だな」

天使の目からは、今はハッキリとした涙が一しずく、流れ落ちていた。